

く愛と革命の伝説く

花 と 爆 弾

登場人物

すが

寒村

秋水

秀子

忠雄

百代

1 明治四十二年 夏のおわり 平民社

百代 あたしが兄にたのまれて千駄ヶ谷にある「平民社」をたずねたのは、コスモスがゆれている夕暮れ時でした。

すが 本当にいいの？

百代 「はい」そう答えると、その人は桃色の歯ぐきをニツと見せて笑いました。管野すが、そんな人の名前です。

すが つねから聞いてるでしょ。たいした仕事じゃないの。でも家は人の出入りが多いからご飯を多めに炊いてもらいたいの。

百代 はい。平民社のお手伝いって、もっと難しいのかと思ったら、なあんだ、おさんどんでいいんですか？

すが でもそれが大変なのよ。今まではつねがやっていたの。でも、もう年でしょ、毎日は無理だっていうものだから…。

百代 あたし、毎日だって平気です。

すが 助かるわ、でも秋水先生のことはいいの。私がいいますから。

百代 はい。でも奥様はお疲れじゃないですか？ あたしだったら平気です。ありがとうございます。でも、秋水先生、私でないと…。この間まで入っていたでしょう。

すが ひどいのよ、一日中立たされっ放しで眠らせてくれないの、ご飯だって…。あれ、人が食べるものじゃないわ。あっ、ごめんなさいね、若いお嬢さんに、しようにもないこと。

百代 いえ…、あたし美味しいものいっぱい作ります。

すが ありがとうございます。百代ちゃんが来てくれてありがとう。岡田さんに感謝します。

百代 いえ、兄は先生のお役に立てられるなら、と言って喜んでいきます。幸徳秋水先生ほど自由民権運動をつらぬいていらっしやる方はいないって。それはもう尊敬していますから。

すが ありがとうございます。

百代 それに、奥様のことも。

すが 私？ それとも、出て行かれた千代子さんのこと？

百代 ど、どちらも。

すが すばらしい方よ、千代子さん。学者さんのお譲様で、英語もフランス語もおで

きになるんですって。

百代 ハイ、うかがいました。

すが あなた、女学校は？

百代 とんでもない、お裁縫の養成所へちよつと。奥様達みたいに女学校へ行くなんてとても…、

すが 私、小学校しかでてないわよ。

百代 えっ？ でも兄はすが奥様の書かれた記事のこと、とても素晴らしいって…、
すが フフ…、ありがとう。でもそれだけじゃないでしょ、なんて言ってた？ いいのよ、おっしゃいな。妖婦、奸婦、魔女、それとも…、

百代 いえ、兄は…、兄は「不思議な人だ…」って。

すが 不思議な人？

百代 はい。兄は（兄の真似で、学生運動のアジテーションのように）「千駄ヶ谷にある平民社の才、社会主義者の才、とおーってもえらあーい幸徳秋水先生のお宅におじやましているはずなのに、みーんなすがさんと話してる」って。すがさんがお留守の時間におじやますると、みんなが秋水先生に「すがさんは？」って聞くんですって。まるで「母さんは？」って聞くみたいに。

すが 母さん？

百代 はい。あつ、いえ、すみません…。

すが 私、みなさんと、それほど年が違わなくてよ。せめて、姉さん。

百代 あつ、はい、すがお姉さん。

すが 私を姉様だと思って甘えて。私にも妹がいたの、秀子っていう…。さっき、百代ちゃんがたずねてきた時ね、驚いたわ、秀子にそっくりで。

百代 あたしが…、ですか？

すが ええ。肺結核だったの。お薬代やお医者様の費用、ゆっくり養生させてやれなくてとうとう…、

百代 そうだったんですか…。

すが ごめんなさい、こんな話。さっ、じゃあ夕方から勉強会で若い人たちが集まるからさつまいもでもふかししましょうか。あつ、ひとり甘いのが苦手な子がいるから冷ご飯で焼おにぎりでも作ってあげて。それと、この間出てきた子が足をやられたの、椅子を用意してあげてね。

百代 はい。やっぱり母さん。太陽みたいな…日本の母。

すが 日本の母？ じゃあ、日本の…父もいるっていうこと？

百代 えっ？

すが 母がいて…、父がいて…、子供たち…。日本って…家族？

百代 えっ、じゃあ日本の父って？

すが 天皇！

2 明治三九年（前場の三年前） 冬のおわり 大阪

秀子 お姉ちゃんには、ちっちゃいときからいっぱいやりたいことがあったんや。女学校へ行って英語とかも勉強して、「与謝野晶子」、ああいう物書きになりたかったんや。そやけど、ママ母様が意地悪して、いかせてくれへんかった。お嫁にだって行きとうなかったのに父様がお仕事、上手くいかへんようになってしもうて、仕方なく東京にお嫁に行かはった…。そやけど戻って来て…。それからや、あたしにあんなにうるそうだったのは…。

すが 秀子、いくらあんたが器量良しかて、あんたが凜としとったら、袖の袂に恋文いれられるなんてことあらへんで！ ほんま、しっかりしいや！ ええか、変な男はんにはひっかかったら幸せになれへんで。

秀子 妹のあたしには、つけ文もらっただけでこんな厳しく言わはるのに、自分は出戻ってからしょっちゅう男はんと出歩いてる。

すが ええか。本当にあんたを大事にしてくれる人を見つけて、そういう人と恋をしはって、その好きになった人に、一生、添い続けることが一番なんよ。

秀子 って、あたしには言わはるのに、お姉ちゃんは、職業婦人になったんや。小説家の宇田川文海先生の口利ききで、大阪朝報の婦人記者や。「物書きに一步近づいた」って、毎日張り切ってお仕事に行かはる。お姉ちゃんのいわはることホントちぐはぐなんや。そやけど、いろんなこと諦めてお嫁に行った、そんな頃のお姉ちゃんより、出戻ってから、嬉しそうに世の中の難しいこと話したり記事を書いたりしてるお姉ちゃん見てる方が、うちも、ずうっと嬉しいんよ！

すが 秀子、手紙や！ 手紙！

秀子 なんや？

すが 塚先生や、塚利彦先生からの手紙や！

秀子 東京の平民社の、やろ。

すが 秀子、ようおぼえとるなあ。

秀子 うちかて、おぼえてしまふ、お姉ちゃん、あんまりいわはるから。

すが へえ！ 田辺や、紀州の田辺や！

秀子 紀州？ 東京じゃないの？

すが そやから東京の平民社の塚先生からのお手紙で、和歌山、田辺の牟婁新報の編集長をしてほしいいう手紙なんや。

秀子 牟婁新報いうたら、なんやむつかしいこと書いてある新聞やんか。その編集長なんてすごい！

すが そうや。小さくても、なかなか内容のしっかりした新聞や。「社会主義神髓」を書いた幸徳秋水いうえらい人も認めている新聞やで。

秀子 そうか。お姉ちゃんすごいなあ…、おめでとう。

すが ウン。社長件編集長の毛利清雅さんいうお人がつかまったんやて、いろんなこと書きすぎて。そやから、帰ってくるまで、うちに代理でやってほしいって。

秀子 大丈夫お姉ちゃん？

すが 大丈夫や。塚先生にはご恩もあるし…。

秀子 田辺まで行く御恩ってなあに？

すが それは言えん。けど、大丈夫や。

秀子 じゃ、うちもいく！

すが うーん…。そやな。あんたの身体にええかもしれんな。秀子はもうじき女学校卒業だから、そしたら行こうな、紀州の田辺。青い海に蜜柑のだいたい…緑の山々に映えて…きれいだろうなあ。

秀子 だいたい色の蜜柑か…、うまいやろな。

すが 秀子っ！

3 明治三九年 紀州田辺 牟婁新報社

寒村

紀州の田辺にやって来た僕は、牟婁新報へ行くより先に海にむかいました。海の匂いをかいでいると、懐かしい横浜に帰って来たような気持ちになるのです。

弾圧によって勤めていた「平民新聞」は、廃刊をよぎなくされ、足尾銅山の取材をしても載せる新聞がない。途方に暮れていた僕に堺先生が氣遣って、牟婁新法の仕事をくださったのかもしれない。その女編集長に会ったのは、その日の夕方でした。

すが 君ねえ、どこほつつき歩いてたのかな。海の匂いするぞ！

寒村 と、桃色の歯ぐきを見せて、ニツと…笑いました。ソクツとしました。管野すが、編集長の名前です。

すが 荒畑君、和歌山や新宮の遊郭反対の記事、もう少しなんとかならへん？

寒村 なんとかって…？

すが 反対派の意見だけでなく、遊女の話も聞いてきたのはいいんや。そやけどこの記事には荒畑君の男としての目線が出てはるな。もっと、あの娘らの気持ちに寄り添わな何のために反対運動の記事を書いているかわからへんやないの…。

さあ、うち、取材に出んならん。帰ってきたら書きなおし、見せてや。

寒村 でも僕は男です。どうやったら遊女たちに寄り添う記事が書けるんですか？

男の目線から遊郭に反対する記事を書いたらいけないんですか？

すが へえ…。男の目線で書きたいという自覚はあるんやな。そんなら、あの娘らの話を聞いて、あの娘らのホンマの辛さがどこにあるんか、分かったんか？

寒村 それは…分かりませんでした。あまりにあけっぴろげに笑うから…、

すが ふーん、君って正直やな、男だけ。

寒村 え？

すが あのな、別に男の目線で記事を書いたらいけないわけやないんや。けどこの記事は、遊女の話聞いた男が、男の目線で分かった氣いになって、可哀そがってまとめただけのもんになってんのや。それより、さっき言ってた「あけっぴろげに笑うあの娘らの、ホンマの辛さは僕には分からなかった」って、そう正直に書いてみたらどうや？

寒村 …はい、編集長。

秀子 こんにちは。

すが 秀子、あかんやんか！ 家でゆっくり寝とらんと…！

秀子 そやかて、うち退屈で。

すが 「明星」買ってあげてるやないの。それ読んどき。

秀子 読んだ。

すが じゃ、休まんと。また、お医者様にお姉ちゃん、叱られるさかいな。

秀子 ああ、つまらん。

すが お姉ちゃんだって仕事やで、秀子の相手ばかりでけへんのや。

寒村 いいじゃないか。秀ちゃん、気分がいいんだったら、少し話でもしていくとい

いよ。

秀子 やっぱ、お兄ちゃんのほうが、話わからはる。

すが 秀子、お兄ちゃんなんて、おない歳やろ。

秀子 そやかて、うちより三月早う生まれとるさかい、やっぱお兄ちゃんや。

すが すみません、荒畑君、

秀子 ほら、お姉ちゃんこそ、お兄ちゃんのこと、君だなんて、えばってる。

寒村 いえ、僕は、姉と妹が同時にできて、幸せです。

秀子 ほんま？ なら、もっと家へよって来てくれてもええのに。東京の話、聞きたいねん。

寒村 ハイ、近いうちにうかがいます、

秀子 東京っていいな。芝居小屋とか、シネマとか、カフェとか、いっぱいあるんやろ？

寒村 さあ…、あまり、行ってないからなあ。

すが 秀子、無理いったらあかんやろ。荒畑君はね、芝居どころじゃないねんで。足尾銅山の田中正造さんにたのまれて、鉱毒事件のことを書かなあかんのや。

寒村 いや、あれは僕がぜひ書きたいんですよ。

秀子 ふうん…。

すが 芝居なら、ほら秀子、この間神社の境内でやっていた村歌舞伎、連れていったやんか。

秀子 あんなもん。

すが 秀子、うち取材やさかいそろそろ出かけるけど、荒畑君のじゃましたらあかんで。

秀子 邪魔だなんて…、

すが じゃ、荒畑君、お願いね。

寒村 ハイ、いってらっしゃい。

秀子 いったらっしやあい。フフ…、いっちゃった。お姉ちゃん帰りまた遅くなるのかな。

寒村 編集長、遊郭予定地の地主に話を聞きに行ったんだ。清棲県知事とつながってるらしくて、少しでも尻尾をつかめたらって…。でもあいつら一筋縄じゃないから、遅くなるんじゃないかな。

秀子 フフ…お姉ちゃんのこと、編集長だって、
寒村 そりゃ、編集長だから、編集長。

秀子 ねえ、情死ってなに？

寒村 えっ？

秀子 これ。

寒村 この切り抜き！ …編集長の「情死論」じゃないか。

秀子 「情死こそ、人生の最も神聖なものである。けれどそれは、世に敗れた結果、行われるそれではない。主義の為に戦い、理想の為に戦って、刃（かたな）折れ、矢尽きたる、強き強き情死である」

寒村 や・い・ば。

秀子 えっ？ ああ刃（やいば）か…、

寒村 秀ちゃんは、こんなの読むもんじゃないよ。

秀子 なんでや、なんでうちはあかんの？

寒村 秀ちゃんは、早く病気をなおして、いい人の所へお嫁に行くんだな。

秀子 うちが、お嫁に？

寒村 ああ、

秀子 お姉ちゃんがそう云うたんか？

寒村 そうじゃないけど、みんなお嫁にいくもんだろ。

秀子 うちはお嫁になんかいかんもん。お姉ちゃんかて、行ったけど、戻ってきはった。
寒村 それは、あの人は…いろいろ、

秀子 うち、お嫁に行くなら、お姉ちゃんのところかええな。

寒村 えっ…？

秀子 お姉ちゃん、男の人みたいやもん。キリリとして、負けず嫌いで。まま母様が
いじわるして小学校しか出してくれへんかったけど、頑張って一人で勉強しと

るんよ。そいで少しずつ記事を書かせてもらって…今は編集長。流行りの甘ったるい文章じゃないで。うち、お姉ちゃんの書くもん好きなんや。みいんな、みいんな好きなんや

寒村 そうだね。秀ちゃんはお姉ちゃん子だから、

秀子 家のことかて、きちんとしてはる。お兄ちゃんも食べたやろ。お煮めの味なんか、絶品やんか。

寒村 ウン。

秀子 そや。お姉ちゃんほどんなことかてできるんや！なのに…、お兄ちゃんも聞いているやろ、お姉ちゃんのこと。

寒村 はっ？

秀子 いろんな…：悪いウワサ！

寒村 僕、信じてないから。

秀子 よかった！さすがお兄ちゃんや。妖婦とか奸婦とか魔女とか人やないみたいなこと言われて…、

寒村 秀ちゃんも気にしないほうがいいよ。根も葉もないようなこと。編集長がいんな男と逢引してるとか、

秀子 あっ、あれか、あれはほんまやで。

寒村 えっ！

秀子 出戻ってから、いろんな男はんと飲み歩いてはる。でも、それってそんなに悪いこと？ だったら、嫁いだ先の旦那さんが実の母親とあんないやらしいこと…！ それを知っても、あのまま東京で辛抱する方がええことなの？

寒村 えっ？ まさか…

秀子 うちが男の人やったら良かったのに。うちが男の人やったら、お姉ちゃんをお嫁にもろてあげて、いっぱいいっぱい本を買ってあげて、英語も習わせてあげたのに…。

寒村 秀ちゃん！

秀子 あの時、そう決めたんや。お姉ちゃんには絶対幸せになってもらうんだった…！

寒村 あの時？ あの時って、秀ちゃん？

秀子
いつだってお姉ちゃん、口をキュッと結んで、顔をツンと上に向けて生きてお
ったんや。ママ母様に文句を云われへんように…。けど、ママ母様にはそれが
又、しゃくの種だったのかもしれない。それともお姉ちゃんがいちばん、亡
くなったお母ちゃんに似ていたからかもしれない。おかげさんであたしや弟は、
つらくあたられることはあらへんかった。お姉ちゃん、自分がつらい時は泣か
へんのや。そのくせちょっとでも悲しい旅まわりのお芝居なんか見るとホロッ
と…。昨日、海へ行ったんや。あたしと、お姉ちゃんと、お兄ちゃんと…。三
人や。あんな笑い方するお姉ちゃん、はじめて見たんや。桃色の齒ぐきまで見
せて、ニツと笑うお姉ちゃんなんて…。ずっと、ずうっと、今が続くといい。
うち、そう思ったんや…。

すが
はようあがらんと、

秀子
今いくで。

すが
荒畑君も、

寒村
はあい。

秀子
ほら、こんなん取れた。

すが
キヤー、何、その昆布。

寒村
ハハ…、明日のおみおつけの具かな。

秀子
もつとさがしてくる。

すが
氣いつけてな。あまり遠くへ行くとあかんよ。…ああ…、あの子ったらもうあ
んなに遠く…。

寒村
ハハ…、

すが
ハハ…、東京へ帰ったら、堺先生によろしくね。

寒村
ハイ、申し訳ありません…遊郭反対の記事を書いているが、これからという
ときに東京へ戻らなければなりません。

すが
仕方がないわ。東京の平民社の方が「人手が足りなくて帰ってこい」って言う
んですもの。

寒村
堺先生から「今の日本の社会主義運動を支えているのは牟婁新報だけだ」そう
言われて田辺まで来たのに…、

すが 私はなんとしても、毛利社長が出獄するまでは牟婁新報を守っていく。だから荒畑君もこっちは気にしなくて、平民社の力になってね。

寒村 はい。

すが この海の水…こんなにも青いのに、掬うと透明になって…キラキラしてる…。これ、あげる。

寒村 そんなこと言っても、ほら、こぼれて消えていきますよ。

すが こぼれて消える水だって、これだけ集まり広がっていけば、どこにだってつながっていく…。

寒村 どこにだって、か…。

すが 世界にだって…。

寒村 サンフランシスコ！ 秋水先生は、今、サンフランシスコにいらっしやるんですよ。

すが サンフランシスコにだって、荒畑君の生まれた横浜にだって、この水はつながっている…。

5 海鳴り、男たちの影、そしてすが（独り芝居）

すが（秋水に似た影に） 嵐や、まるで嵐や。どうっ、どうって…。あれは海が鳴いているんじゃないで、怒るとるんや、海だって生きとるさかいな、怒って復讐してんのや。

すが うちもそうや。なにかもようになって、嵐の中へ飛びこんでいくんや。家ん中にいれば、びしょぬれになることもあらへんに、そうせずにはいられへんのだ。人は笑うわな。けど、捨てばちとは違うんや。そうやって、うちはいつだって新しくなっていくんや。

すが（過去の男の影） 新品の女なんてつまらない。すかすかしてて、味もない。…って、どなたがおっしゃったのかしら。おめでどう、おもらいになるんですってね、その、新品のお嫁さん！

すが そやから、もう、これっきりにしましよな。

すが うちが冷たい女やて。うちほどやさしい女はあらへんで。お嫁さんにしてってせまるわけでもなし、着物を買ってとせがむわけでもなし…、えっ、身体はす

り寄っても心はちいとも開かへん…、そんなの、あたり前やないの。私は私だけのもんやねん。

すが（寒村に似た影）　　うちは好きでもない男に嫁いで、結局は別れてきた出もどりや。そやから、寝たきりの父や、弟や妹を食べさせる為に泣く泣く文海先生の妾になったんやと云えば、それはそれで、かわいそうな女として世間の人は納得してくれるんやろな。けど、それは違うで、それは違うんや、うちからやねん。うちからしかけるんや。理性のかたまりのような、権力のかたまりのような、えらあい先生達。その理性の最後の最後の所で、あっさりくずれていく…。それを見つめるうちがいて、そのいつときの喜びの為だけに、私は私になだれこんでいくの。

すが　　キリストはん？　そんなこともあったなあ…。白いベールかぶったら、きれいになれるかなあ…なんて。お祈りも讚美歌も好きやった。御奉仕のお手伝いも。そやけど人は死んだら、水と炭酸ガスになるだけや。

すが（過去の男の影二）　　何いうたかて、かまへんで。たんと笑うとええんや。転落婦人の救済。えっ？　娼婦が娼婦を救って…、ああ、それで笑ってるんか。けど、うち、娼婦やないで。男はんとそうなたかて、うちは記者や。記事書いて、12円もろて、それで御飯食べてます。

すが（過去の男の影三）　　まさか、荒畑君とそうなるわけじゃないですか。えっ、お前さんだったら、赤子の手をひねるより簡単だ…。あんたって人はうちのこと、わかっているようでわかっくらへんなあ…。

すが　　地獄？　そう地獄行きかもしれへんなあ。どうせ、まっとうな死に方はせえへんやろ…！　だけどうちは物書きになりたかったんや。明星の晶子はんのように恋をして、恋の歌を詠んでみたかっただけなんや。

すが（独白）　　海辺をあるいて帰りました。深くて暗い海…。この海の水は遠く、遠く…横浜ともつながっている。寒村の生まれた横浜の街。上気した頬で、唇を尖らせながら告発記事を書いている時の右肩上がりの後ろ姿を想いました。清らかな人は清らかなままがいい。秀子も寒村も。この深い海の水底に身体を横たえたら、私もそうなるかもしれない…。ふと、そうよぎりました。私を通り過ぎていった男達。いまわしい出来事…。耐えて、秘めて、あきらめて…。だけど、ふつつつと発酵し、ぶつぶつとあふれ出そうになり…。だから寒村が東京へ帰

ってホツとしたんです。でも、その何倍も何倍も、骨の、骨の中までキシキシと痛みました。はじめての…恋でした。

6 明治三九年 夏のおわり 京都、荒神口河原町の家

秀子 その年の夏のおわり、お姉ちゃんとあたしは、京都、荒神口河原町に移りました。田辺の牟婁新報の捕まっていた社長さんが戻ってきたのです。おそ咲きの朝顔が咲く家でした。東京へ帰ったお兄ちゃんからは手紙がよく届きました。

寒村 前略、神田の錦輝館で行なわれた幸徳秋水帰国演説会は、僕ら若い者に熱狂的な拍手をもって迎えられました。

すが 荒畑君がために手紙をくれるから、機関誌の「光」を読むよりも早く党の様子がわかるわね。

秀子 ほんと、

すが ……あら、堺先生のお宅も大変ね。荒畑君だけじゃなくて、帰国した秋水先生や、出獄してきた大杉さん達も居候してるそうよ。毎日、蜂の巣をつついたような騒がしさだって。

秀子 お姉ちゃん、早くご飯食べようよ。うち、お腹すいちゃって、

すが ごめん、ごめん。あらら、へえ……、えらいなあ、昼は「光」の編集、夜は正則学園へ通って英語の勉強してはるんやと。

秀子 お姉ちゃん！ そんなにお兄ちゃんの手紙読みたいん？

すが そんなことない。さ、ご飯食べよ。

秀子 うちは待ってました。寒村のお兄ちゃんが、お姉ちゃんをたずねてくる日を。うち、東京へ手紙をだしたんや。お姉ちゃんがさみしそうにして、元気ないからって、効果はてきめん。秋のお彼岸のお休みに来るって書いてありました。うちはその日、用事をつくりました。弟の正雄と待ち合わせして、父様のお墓まいり。夜は、女学校時代の友達の家へ行く予定でした。うちは、姉様が大好き。寒村のお兄ちゃんも大好き。二人とも大好きなんや。そやからわかるんや。

好きだから好きな人の気持ち、手に取るようにわかるんや！

すが
ねえ秀子、今日は暑いから水筒持っていかとあかんよ。なんや秋の始まりと
いうのに変なお天気。

秀子
ウン。

すが
やっぱりうちも行くのかな。だって久しぶりやんか。正雄に会うの、それに
お墓参り。

秀子
ダメダメ、せっかくながらお姉ちゃんの休日つくったのに。

すが
そやかて、

秀子
たまには身体を休めてよ。それに、ゆっくり原稿を書いて。

すが
じゃ、家の仕事でもしているわ。前から気になって仕方がなかったんよ、水ま
わりのぬるぬる。

秀子
お姉ちゃん！

すが
ハイハイ。じゃ、洗濯だけにしておくわ。半襟、あれはやっぱり真っ白じゃな

秀子
お姉ちゃんたら…！

すが
秀子！

寒村
秀ちゃんの手紙で、編集長が過労で身体をこわして寂しそうにしてるって…、
もう僕は心配で休みを待って、京都の荒神口河原町にむかいました。玄関で声
をかけても返事がありません。変だなあ、と思って裏庭にまわってみると…、
編集長が洗濯物を取り込んでいるところでした。

すが
えい！ ……ったく…！

寒村
これかい？

寒村
僕は物干しに引っかかっている真っ白な半襟を取りました。

寒村
はい。

すが
…！

寒村
元氣そうじゃないか。

すが 荒畑君も…。
寒村 僕は元気じゃなかったよ。
すが そうなの？
寒村 好きな人と離れてたんだ、元気出るわけないじゃないか。
すが ……！
寒村 そうだろ。
すが ……うん。

7 明治四〇年（前場より一年後） 冬 東京郊外柏木の新居

寒村 翌年の冬、僕達は、東京で所帯を持ちました。もちろん、秀ちゃんもいっしょです。堺先生が、これまでのすがさんのことを話してくれました。すがさんが堺先生に話してくれるように頼んだそうです。先生は本当に聞いてもだいじょうぶか？ そう訊ねてから話してくれました。そんなすがさんとの毎日は、僕の主義者人生のなかで、ほんの一時の、貧しくても心豊かな日々でした。その頃から僕はすがさんのことを「姉ちゃん」と言うようになりました。「姉ちゃん」と呼ぶとほっとしたんです。それから姉ちゃんは僕のことを「寒ちゃん」秀ちゃんは姉ちゃんのことを「お姉ちゃん」。姉ちゃんに、寒ちゃんに、お姉ちゃん！

秀子 うわあ、すごい、ごちそう。
すが 今日は特別、
秀子 ね、ね、なあに？
すが 廃刊になっていた「平民新聞」が、党の機関紙として日刊になったの。そのお祝い。
秀子 うちも手伝う。
すが ダメ、秀子は寝ていなさい。
秀子 そやかて寝てばかりで、氣いくるいそうや。
すが じゃ、角の酒屋さんいって、お酒買ってきて。ハイ、これで。
秀子 ウン。
すが あったかくしていかんと。

秀子 はあい。あれ、お姉ちゃん、外にへんな人が…。

すが えっ？

秀子 ほら、そこ。あの電信柱のかげに…、

すが ああ…、あの人。

秀子 えっ？

すが 気にすることないんや。荒畑寒村と管野すがづきのおまわりさん。専属やで、すごいやろ。

秀子 なんでや。お姉ちゃんも、お兄ちゃんもなあんも悪いことしてへんのに。

すが そうや。みいんが、心ん中ぬくいなあつて思える世の中にしたいだけやねん。

秀子 ふーん、

すが さあ、買うてきて。あの人なあ、なあんもでけへんさかい。

秀子 うん、いつてくる。

すが 氣いつけてな。さてと…、ねえ、おまわりさん、おまわりさんも飲みに来ませんか。ご存知でしょ。今晚うちでお祝するの。

寒村 姉ちゃん、角の酒屋まで聞こえてるぞ。

すが あらっ、おかえりなさい。

寒村 ハイ、創刊号！

すが わあ！ あらっ、みなさんは？

寒村 後からくるって。これ、姉ちゃんに早く見せたくて、先に。ほら、ここ、ここ。

すが まあ、秋水先生の発刊の辞ね。

寒村 吾人は明白に吾人の目的を宣言す。平民新聞発刊の目的が、天下に向つて社会主義的思想を弘通するに至ることを宣言す。

寒村とすが 世界に於ける社会主義運動を応援するに在ることを宣言す。吾人は言論の自由を有す。

寒村 名文だろ。姉ちゃんに早く読ませたくてさ。

すが 先生の文章って、節があるのね。詩を読んでみたい…。

寒村 ウン…。

すが 寒ちゃん、ありがとう。

寒村 急に…なんだよ、姉ちゃん。

すが 私、本当に…ありがたいと、思っています。

寒村 やだな、あらたまつて。

すが 主義のもとに、私達ほど強く結ばれている平等な同志はいないわ。これで秀子
がもう少し元氣になつてくれたら。

寒村 そういえば、秀ちゃんは？

すが そこまでおつかい。

寒村 大丈夫かい、この雪の中？

すが このくらい外に出してあげないとお勤めしたいって言い出すから。自分は病氣
じゃないっていいはつて。

寒村 職業婦人に憧れてるんだよ。

すが そうなの。この間、三越呉服店の販売員になりたいって言い出した時はヒヤッ
としたわ。

寒村 あれだつて、姉ちゃんのせいさ。

すが 私のも？

寒村 姉ちゃんがいつも、これからの女の人は、なんて言ってるだろ。

すが それとこれとは…。

寒村 おかしいよ。姉ちゃんは、自分はいつも男に負けまいと張り切つて仕事をし
あの子は病氣なのよ。てるのに、秀ちゃんは外に出さないんだから。

秀子 ただいま。あれっ、お客さんはまだ？ ねえ、なんかあつた？ 変なの、お巡
りさん、笑つてはつた。

寒村 笑いもするよ、姉ちゃんたら主義者の本が出たお祝いに、お巡り、呼ぶんだぜ。

秀子 お姉ちゃん！

すが いいじゃない。…でもおかしいわね。そろそろ着いてもよさそうな頃なのに。

寒村 うん、ちよつと、駅の方までみてくる。

秀子 ハイ、これ。

すが ありがとう。秀子、かんにんな。今夜もうるさくなりそう。

秀子 ハイ、ハイ。うちはええけど、お姉ちゃん達、かあいそう。

すが なんや？

秀子 だつて、新婚さんなのに、毎日、毎日誰か泊まらる。これじゃ、うち、いつ
までたつてもおばさんになれへんな。

すが 秀子ったら、…そんなこと、いいんや。

秀子　そやかて。

すが　いいんや。

秀子　赤ちゃん、ほしいやろ。

すが　あきらめとるから…いいんや

秀子　なんや、あきらめることないやろ、

すが　出来へんから、ええのや

秀子　えっ？

すが　…ええのや。

秀子　お姉ちゃん、あん時の、あの時のせい？

すが　そうや。

秀子　うちのせいや、うちがママ母様の言葉にのせられて、買い物にかへんかったら…。いくら、そのあわん義理の娘かて、あんなむごいこと…。お姉ちゃん的大好きな本、めずらしく買ってきて…。うちと弟の正雄は、なんにも知らずに、ママ母様に連れていかれて…。あほらしい。まさかあれが、ママ母様のしくんだワナだったなんて…。

すが　あんたのせいやない！　うちが生意気だったさかい、それに、うちは母様に似てたさかいな、あの人は、いつだつてうちをおとしめる機会をうかがっていたんやもん。

秀子　あの日帰ってきたらお姉ちゃん、氣イ失って倒れてた。真白な胸がはだけて、着物の裾から深紅（まっか）な血イが…。子供のうちかてそれがどういうことか…。しかもあの男、ママ母様と出来てたなんて…。

すが　ややこができたんや。闇の墮しオババんとこ行って…。二度とややこのでけへん体になってしまった…。けど、こればかりは堺先生にも、寒ちゃんにもいえへんかった。

秀子　あん時、うち、どんなことがあつても、お姉ちゃんのそば、離れんと生きていこう…。そう思ったんや。

すが　秀子…！

寒村　ただいま。姉ちゃん、みんなをつれてきたよ、堺先生も。団子！　大和屋の団子買って来たぞ、姉ちゃんこれ好きだろう。さあ、皆入った、入った！　姉ちゃんは、みんなが来てくれると喜ぶんだ。

すが 寒ちゃん、ありがと。甘いお団子。

8 明治四〇年 春 柏木の自宅

秀子 それから、寒村のお兄ちゃんが取材中の足尾で大騒擾がおこりました。栃木の足尾銅山で鉱毒が流出し、渡良瀬川沿岸の農地が汚染された、世にいう足尾鉱毒事件です。取材費は出るもののほんのわずかなのでいつも持ち出し。だからお姉ちゃんのやりくりはもう大変！ いつ休んでいるのかと思うくらい働いて、働いて、働いて…。だからうち、お姉ちゃんの力になったのになんやしらん身体がだるうて動かれへん。何や頭がぼうつとして…、

すが さあ、秀子。お薬飲んで、早うお布団入ろうな。

秀子 お姉ちゃん、うちな、洋服つくるんよ。深紅（まっか）なドレス。
すが ステキね。

秀子 それ着て、お芝居、観にいくんや。

すが お姉ちゃん、買うてあげるさかい、さあ、はようお布団入り、うち自分で作るんや！ ほら、これで断つんや！

すが あぶない！ 秀子、早よ、そのハサミ、お姉ちゃんに返して、やあだ。

すが そうだ、晶子の一番新しい歌集も買うてあげる。『夢の華』。秀子、きっと気に入るやろ。

秀子 お姉ちゃん、紅いドレスつくろう。お兄ちゃんも一緒にね。

すが そうだね、秀子。お兄ちゃんが足尾から帰ってきたら作ろうね。今じゃなきややだ。

すが それより秀子、お医者様に診てもらおうよ。それからの方がゆっくり作れるよ。やだ、やだ！

寒村 ただいま。姉ちゃん、下着用意してくれないか。

すが おかえりなさい、

秀子 お兄ちゃん深紅（あか）いドレス。

寒村 ああ、あとでな。又、足尾へこもらないと…、あつ、これ、持っていくぞ。

すが それはお医者様への用だて。

寒村 えっ？

すが ううん、いいの。

寒村 じゃ、にぎり飯作ってくれないか。山ん中だろ、いつ、めしにありつけるかわからないから。

すが すぐ炊くわ。

寒村 なんだ、飯もないのか。

すが ごめん、寒ちゃんいない時は、いつも残りものなのよ。わかっていたら炊いておいたんやけど、すぐ用意するさかい、待って、

寒村 そうもしてられないんだ。じゃ、いいよ、行くから。

すが 待って、秀子が、秀子が大変なんや、

寒村 医者につれて行けよ。

秀子 お兄ちゃん、うちね、ドレスつくるんよ。深紅なドレス。

寒村 秀ちゃん…！

寒村 ただごとではない…。そう思いました。けれど僕は、そんな秀ちゃんと姉ちゃんを残して足尾に戻りました。足尾鉱毒事件を世に訴えるため、是非とも書かねばならない、これは使命だ、そんな思いにとりつかれていました。『谷中村滅亡史』僕の処女作です。だけど…、それからほどなくして、秀ちゃんは息をひきとりました。本当に僕の妹は、切ないほどに美しい娘でした。庭には春の日差しを浴びた矢車草がひっそりと咲いていました。

9 明治四〇年 秋 堺先生宅、その帰り道。

寒村 そしてその年の秋、堺先生は、ご自宅で、僕の『谷中村滅亡史』の上梓祝いをして下さり、僕と姉ちゃんは二人そろって出掛けました。秀ちゃんが死んでから、僕たちがぎくしゃくしているのを見かねた堺先生が、わざわざ席を用意してくれたんです。秋水先生もいらしてください、僕は感激です。姉ちゃんも久しぶりにお酒を飲んで、はしゃいでいました。だけど僕は帰り路…、

寒村 姉ちゃん、なにもあそこまで、秋水先生にたてつくことないじゃないか。

すが たてなんかついておらん。

寒村 だけど先生、あきらかに不機嫌そうだった。

すが そうやるか。私には、面くらった顔にしか見えへんかった。なあ寒ちゃん、ミルク・ホールいかへん。久しぶりに二人で出かけたんや。なんや、このまま帰るのもつたいないんや。

寒村 ぼくは明日から大阪だぞ。早く帰って明日の用意だ。

すが コーヒーって、飲んでみたいんや。うちそういう所、いったことないさかい、一編いって見たかったんや。

寒村 君は待合いは行っても、ミルク・ホールは行ったことがないんだな。

すが 寒ちゃん……！

寒村 ごめん。

すが どうせ大阪であることないこと聞いてきたんやろ。

寒村 だから、ゴメン、て……、

すが 寒ちゃん疲れとるもんな。

寒村 ごめん、今度、行こう、ミルク・ホール。

すが うん……。

寒村 しかし、筒袖の巡査には、びっくりしたよ。「お帰り」だって。僕らが堺先生のお宅にいる間ずっと外で待ってたんだぜ。大変だなあ。

すが 悪いことしたわ、山田さんに。もう少し早くおいとますればよかった。

寒村 山田さんていうのか。あの巡査。

すが 山田さんの息子さん、秀子と同じ病気なんだって。

寒村 えっ？

すが だから秀子の時ね、お悔やみ言ってくれたのよ。

寒村 あっ、そう……へえ……！

すが その息子さんねえ、お父さんに言うんですって。あの人達が悪い訳じゃないって。

寒村 姉ちゃんは不思議だなあ。なぜかみんなひきつけられてしまっただ。筒袖のお

まわりとまでいつの間にか、友達みたいになっちゃって。今日の秋水先生だっ

て……。

(塚先生の自宅)

秋水 不思議な人でした。荒畑寒村君の女房、すがさんです。ウワサは聞いていました。まあ、主に悪いウワサです。しかし、ウワサのように、女を武器にする人ではありませんでした。むしろ女であることによって降りかかってくる災厄や悪評、それらをバネに生きているような人でした。

すが 先生、先生は何故、奥様がいらつしやるのに、女を買いにいかはるんやろ？

寒村 おい、姉ちゃん、よさないか！

秋水 荒畑君、かまいません。すがさん、すがさんはなぜ、ご主人がいらつしやる前で、そんな質問をされるのです？

すが 教えていただきたいのです、先生から。

秋水 ほう…

すが 前の奥様は、教養がないうえに器量が悪いと、土佐へ帰しておしまいになったそうですね。

秋水 あの人は、母が勝手に連れて来た人でした。

すが 今の奥様、千代子さんは、器量が良くて、英語も仏語もおできになる才女かどうかがありました。なのに、おもしろくないとおっしゃって、はじめての夜に、女を買いに行かはった…と聞いています。

秋水 ハハ…、そんなこともありましたかな。

寒村 姉ちゃん、よしてくれよ！

すが 私、先生のこと、とても尊敬しているんです。ですけれど、先生の…、いえ、主義者の男の人達の、女を人間として見ていない所が、どうしても納得いかしません。

秋水 確かに私は女を女として見ているところがあります。ではすがさん、どうあれば良いのですか？

すが なぜ私なんかに関かはるんです？ 先生のように有名で立派な主義者やったら、分からないはずありませんでしょ。女も息をして、怒ったり、泣いたり、笑ったり、そうやって生きている当たり前の人間だということを、民衆だということこ

とを。人間を売り買いするんは人身売買や。売り買いされる人間は奴隷いうねんで。ええんやろか？ 主義者の先生が、民衆を奴隷として扱って。

秋水 手厳しいですね。いやしかし、確かに。すがさん、君は賢い。

すが いいえ。賢い女はねえ、だまって、だまっただけやねん。夫が女を買いに行っても愚痴も言わずニコニコ女房。それが先生方の理想の妻ですか？ 妻を民衆、夫を政府やお金持ちと言い換えてごらんになったら？

秋水 賢い民衆は、ブルジョアジーが民衆を奴隷として扱っても、黙っただけにして、ニコニコと政府や金持ちに従うということですか。それは確かに困りますね。ところで、寒村君が真青な顔をしていますよ。

すが そうですか。そうですね。ではこのへんで止めときます。

秋水 そういつて、荒畑寒村君の女房は、桃色の歯ぐきを見せて、ニツと…笑いました。不思議な…人でした。

秋水 寒村君、君のかみさんは実に愉快だ。

寒村 はあ、どうも…、

(柏木の自宅)

すが 寒ちゃん、お茶飲まへん？

寒村 …。

すが まだ、おこつとるん？

寒村 そんなこともないけどな。

すが 私、そんなに秋水先生に悪いこと言った？

寒村 悪くはないさ。悪くはないけど…。うまいな。

すが えっ？

寒村 お茶、

すが ウン。

寒村 …コーヒーじゃないけどな…。

すが 私ね…昔、堺先生が「万朝報」という新聞の身の上相談で、強姦された女の人に「犬にかみつかれたようなもので、早く忘れてしまったほうがいい」って答

えているのを読んで、感激したの。そっか、あの男は人間じゃない、犬なんだ。犬のことで悩んでも仕方がない…、そう思わせてくれた堺先生にお手紙出して…、それからかな、主義のこと、考えるようになったんや。

…そうか。

寒村
すが
そやけど、それは違うと思うようになったんや。あいつは犬じゃあない、人間の男や。人間の男だと思って、忘れないって決めた！

……。

すが
寒村
むかあしのことや。そやからキリストはんいたり、仏さんいたり、神さんたずねてみたり…、みいんな好きだけどみいんな嫌い、そやからみいんな捨てた！

寒村
でも、主義はすてない。

すが
そうやな…、うちは主義者や！ けど砂糖は甘くて…それで、甘いのは、やっぱり、おいしいって、思うんや。

寒村
だから姉ちゃんは、ブルジョアジーにあこがれるって言うのか？ 清貧に耐えられないのか？ 確かに僕は着物どころか、かんざし一本買ってやれないもんな。

すが
そんなこと言ってんじゃないよ寒ちゃん、お金がないことがつらいんじゃない、そのことで可能性が失なわれてしまうことがつらいんや。

寒村
すが
僕が姉ちゃんの可能性を閉ざしてる、金のないことで。そう言いたいんだろう！
違うよ、寒ちゃん！

寒村
はげしく閉めたガラス戸の音が、秋の夜空に鋭く響きました。僕は、はがき一枚、出しませんでした。姉ちゃんからも、何も言ってきました。僕は…、僕は、姉ちゃんの言葉を受け止めきれなかった、秋水先生みたいに鷹揚に……。
ああいうふうになりたかったのに……。

10 明治四十一年6月22日（前場より一年後） 神田警察署

秋水
翌年、明治41年6月22日。神田の錦輝館において山口孤剣君の出獄歓迎会後のデモ行進で、神田署の警官と赤旗のうばいあいになりました。その騒動で、大

杉栄君、荒畑寒村君等が検挙され、止めに入った塚君や山川君も検挙されました。

すが 荒畑寒村に会わせてください。えっ？ 家族じゃないと駄目なんですか？ 妻

です！ そうです、私は荒畑寒村の妻です！

寒村 姉ちゃん……。無政府党、万歳！

すが やめてー！ そんなにムチで打ったら、寒ちゃん死んじゃうよー！

寒村 姉ちゃん……

秋水 彼らが逮捕されたことを知り、すが君等女性陣も神田署に向かったと書面で知りました。

すが 私まで引っ張って行くのかい？ 何したっていうんだよー！

寒村 やめろー！ 姉ちゃんに手を出すな！

すが 離せ、離せったら！

寒村 姉ちゃん！

すが やめてー！ やめろー！

秋水 その頃わたしは、病に臥せて土佐の中村に帰っておりました。しかし連絡を受け、直ちに上京。もう寝てなどいられません。居ても立っても居られない、そんな思いでした。

すが あんときと同じや……。留守番の日の忌まわしい消したい記憶……。あんときは、うちが女だなんて気いついておらへんかった……。けど今は違うんよ、私は女。そしてあいつらは犬じゃなくて男。いつだって私たちにのしかかってくる支配者！ 乱暴に押さえつけてくる……。絶対許さへん。そっちが体で教えよいういなら、こっちかて体張って、命かけての抵抗や！ まま母さん……子供にとつての親。嫁いだあの家……夫と姑。妻にとつての夫、女郎にとつての客、女にとつての男、民衆にとつての政府……。いつだって下のもんを上から押さえつけてくる、その、いっとう上からのしかかってくる男の命と引き換えに、思

い知らせてやるんや！

1 1 明治四一年 赤旗事件の裁判

寒村

それから二か月後、八月十五日、朝九時。赤旗事件裁判。編み笠をかぶって縄で一列に縛られたまま法廷に入ると、先に入った連中からどよめきがおこりました。秋水先生が、傍聴席にいてくださったんです。肺病を押して我々の為に土佐から上京、裁判を見守ってくださいっている…！ 皆、感動していました。先生、長旅などして大丈夫なんですか？

秋水

山川君、痩せた…、寒村君、だいぶやられたようだ、歩き方が変だが大丈夫か堺君、君が泣くな…。大杉…、君の様子が変わらないのは救いだ…。一人一人を、目で励ました。そのなかで、一人、その励ましを拒否するような凜とした、挑むような態度で、裁判官に、いや、その場の男たちに、その人は訴えた。

すが

申し上げます。取り調べでは、女の私の口からはとても申せぬような陵辱を受け、虚偽の自白をさせられました。とても申せぬようなことですので、どのようにご推察いただいても、事実はそれを上回る、とだけ、申し上げます。

寒村

姉ちゃん……！

秋水

退出の際、その人は、立ち止まり、確かに傍聴席の私を見ました。まるで「何故お前はそこにいるんだ」と、言わんばかりの、刺すような、一瞬の静止でした…。

1 2 明治四二年 巢鴨 平民社

忠雄

僕が巢鴨の平民社をたずねたのは、翌年、明治42年2月4日のことです。「んな時に戻るなんて新村忠雄は馬鹿だ」僕のことをそんなふうに言うやつもいました。けれど何としてでも、秋水先生をお支えしなければならぬ、そう決心したからです。そしてそこに…

すが どうや、きれいやろ。こっちもおいしいで。

忠雄 その人は、桃の花とちらし寿司を持ってやって来ました。

すが おひなさんや。

忠雄 そういつて、桃色の菌ぐきを見せて、ニツと…笑いました。その人が、菅野すがであることはすぐにわかりました。ゾクツとしました。

すが もう、荷づくりはできたんか？

忠雄 はい。何とか…。

すが 大変やったなあ、急に大家さんから出ていけ、いわれて。

忠雄 どうしようもないですよ。警察が大家さんを脅しにかかるんですから。どうしても出ていってくれと泣いて頼まれて…、

すが でも、千駄ヶ谷の家が見つかってよかったじゃない。

忠雄 はい。

すが 先生は？

忠雄 それが、書き物をしていて…。だから先生の部屋はまだ…、

すが やっぱり…。台所もまだやろ。

忠雄 はい。

すが じゃ、先ず先生の部屋からや。

忠雄 助かります。僕一人で、どうしていいか…、

すが まかしとき。…先生。

秋水 ああ、すが君か、

すが 先生、バクーニンさんも、クロポトキンさんも、引越し、手伝っちゃくれませんよ。

秋水 ハハ…。なるほどそうだ。だが今のうちに書いておかないと、私はもって三年かな…、

すが あほなこといわんといてや、うちかて、先生と同じ肺病やんか。うちはまだまだ逝かしませんで、先生かて、ぎょうさんやることあるやんか。

秋水 すが君は元気だな。肺病病みとはとても思えん。

すが はい。自分が病気やいうこと忘れると、病気の方でも忘れてくれてるみたいです。力仕事は、まかせといてや。

秋水 新村君がおるだろう。力仕事は、彼に任せなさい。

すが はい。でも、先生をこの部屋から動かすには、力不足のようですよ。

秋水 参ったな。

すが 私が手伝います。

秋水 君はしかし、電報局の仕事があるだろう。

すが あそこはクビになりました。

秋水 えっ？

すが 三ヶ月って長いですね。出てきたら、クビです。

秋水 じゃ、今は？

すが 寒村に差し入れにいったり、ぶらぶらと、

秋水 そうですか…。

すが 私達、もう別れているのに、接見する時は、内縁の妻として、差し入れするんです。都合がいいんです。そのほうが、

秋水 そうですね。

すが でも、男の人ってダメ。今は同志として差し入れをしているのに、まだ「姉ちゃん、姉ちゃん」って…、寒村の方から出ていったくせに。

忠雄 先生、すがさんにいただいたちらしずし、こちらへおもちしますか？

秋水 いやそちらへ行きます。

忠雄 はい。

秋水 ごちそうさまです。

すが ほんのちよつと、おすそ分け。

秋水 嬉しいですね。好物なんです。なにかあると、母がよく作ってくれました。

すが 奥様のおかげのよろしいときに、作っておもらいになれば。

秋水 あの人は、おととい国へ帰りました。

すが ……！

秋水 弾圧がどんどん厳しく、どんどんでたらめになってきている。これ以上、彼女のような人を主義者の女房にしておくのは、忍びなくてね。

すが そうでしょうか。

秋水 えっ？

すが 最初の奥様は女の仕事はなんでもおできになるけれど器量と教養が不足で帰さ

れた、次の奥様はおきれいで教養がおりになるけれど主義を理解しないのが
不足で帰された、じゃあ次は？　って…、先生のウソつき！
君だってちらしずしを持ってやってきた。そうじゃないかね？

13 明治四十二年 千駄ヶ谷 平民社 春

忠雄　　同じ年、明治42年、5月22日、「自由思想」の初号が刷り上りました。うすく
て雑誌とは呼べないようなものですが。雑誌をめくる時のインクの匂いって
いいですね。僕もすがさんも嬉しくて…、

すが　　「一切の迷信を破却せよ。一切の陋習を放擲せよ。一切の世俗的、伝説的圧制
を脱却せよ…」

忠雄　　先生のこの出だしの文章、わくわくしますね、リズムがあつて！　とそんな話
をしながら、先生と三人で発送作業をしている最中でした。突然すがさんがフ
ワッと倒れて…、

忠雄　　大丈夫ですか？　すがさん。

秋水　　あとは私達にまかせて、部屋で休んでいて下さい。

すが　　大丈夫。うれしすぎたの、きつと。それでめまいなんかしたのね。

忠雄　　あと、これで、…おしまいですから。休んでください。

すが　　よかった。まさか、朝日新聞にはさんであるなんて、気づかないやろ。

忠雄　　これで、二千部は発送しました。

すが　　フフ…、私達の勝利、後は警察の差押えを待つだけ。

忠雄　　差押えですめばいいんですが、発売禁止、高額の罰金で拘引ということにでも
なったらと思うと、先生のお体が心配です。

秋水　　それは、すが君が引きうけてくれた。

すが　　そのために発行人は私にしているんだもの。

忠雄　　先生、女の人ですよ、すがさんは、それに御病気です。

すが　　私が身がわりにならないと忠雄君、あなた達が入ることになるでしょ、そう
なったら、先生も出版活動も、もつと大変なことになるわ。

すが　　さあ、後は掃除をしておかないと。差押えがきて、どこをあけられても見苦し
くないようにね。

忠雄 掃除は僕がやりますから、すがさんは奥で休んでください。

すが でも…

秋水 休みなさい。そうでないと、こちらの身も持たない。

すが ええ…それじゃあ、忠雄君、お願い。(去る)

忠雄 はい……。先生、これを機会に、奥様を呼びよせてはいかがですか。

秋水 千代子とは、三月前に離婚しました。

忠雄 それは、奥様の身内に判事の方がいて先生との板挟みで奥様が心を重くしているから、ですよ。

秋水 そう言って、私をかばってくれているそうだね、君は

忠雄 先生、奥様を呼びもどして下さい。でないと、すがさんとのウワサが広がって

秋水 しまいます。

秋水 噂ですか。

忠雄 なにもすがさんを、追い出せといっているわけではありません。

秋水 しかし、私はすが君が好きだ。すがくんも私を好きでいてくれる。

忠雄 先生…！ うらぎったわけですか、僕達を…！

秋水 うらぎるものにも、ただ、好きというだけです。恋愛は自由であるべきです。

秋水 「一切の陋習を放擲せよ！」 結婚という制度に縛られ、自由な恋愛を攻撃する

秋水 のは放擲すべき陋習ではないのかね！

忠雄 先生、すがさんは今でも荒畑君の内縁の妻として、面会に行ってるんですよ。

秋水 あんな、むごいことをされた荒畑君を見たら、差し入れに行きたくなるのは、

秋水 同志としても人間としても自然な感情でしょう。

忠雄 たとえ、そうであっても、荒畑君にしてみたら、すがさんへの想いが、すがさ

秋水 んの親切心以上にふくらんでしまうものではありませんか。

秋水 そうかもしれないませんが、それもまた、荒畑君の自由です。

忠雄 それでなくとも迫害が烈しくて、同志が一人減り二人減り、最近はいつもの連

秋水 中も来ないではありませんか。彼らは、先生とすがさんについて、唾棄すべき

秋水 破廉恥なことを書いて騒ぎ立てた連中を、デマ、ゴークだと反論して先生を守っ

秋水 て来たんです。なのに、デマではなかった、と知ったら…、彼らは絶望します。

秋水 新村君！ 私はすが君との関係を問われれば、隠す気はない。だが、あえて話

秋水 すことでもないと思ってきました。彼女は今、潔い決意で拘引を引き受けてく

れています。彼女がこれから主義の為に受ける精神と肉体の苦痛を思いやれば、
どうして私とその間に、千代子を呼び戻すことができますか。そのことで、同
志が去っていくことがあっても、やむを得ぬことです。新村君、君も私に氣遣
うことはないんですよ。

忠雄 僕は…、僕は先生とここに残ります！

14 明治四二年 千駄ヶ谷 平民社 夏

すが それから私は、千葉監獄の寒村に、秋水先生とといっしょになったことを報せ
ました。彼からは、

寒村 主義の名によって快諾です。新家庭の円満、幸福ならん事を心から祈ります。

すが そう、手紙に書いてありました。そのあまりに潔い文面に、却ってそのすき間
から零れ落ちる寒村の淋しさ、無念さを思い、私は膝を抱えて泣きました。

秋水 その日彼女は、ひとり部屋の隅の暗がり壁を向き膝を抱えて泣いていたので
す、その時、私ははつきりとすが君を守りたい、そう強く思ったのです。

忠雄 先生、お手紙です。

秋水 ありがとうございます。

忠雄 亀崎、宮下太吉って…誰ですか？

秋水 大阪の森近君から紹介のあった男だ。煙山専太郎の『近世無政府主義』で、口
シアのナロードニキの革命運動の歴史を知って感動したと言っていたそうだ。

すが それ、私もとても感動したわ。

忠雄 僕もです。日本では天皇陛下を神聖侵すべからずとされているのに、外国の
革命家たちはこんなにも勇敢に皇帝と闘っているのかと…

秋水 そういった方法はいづれ必要であろう、しかし今はその時ではない。

すが そうでしょうか？

秋水 早まった行動を起こしてはならない。

忠雄 それではいったいいつが「その時」なのですか？ この国に「その時」はいっ
やってくるのです。

秋水 そう気持ちが焦っているときはその時ではないね。百代くん、お茶を頼む。

百代 ハーイ。

忠雄 ……百代さんって、岡田君の妹さんだったんですね。

すが ほんと助かってるわ、よく気が付く子で。

忠雄 つねさんが辞めた時は、どうしようかと思いましたね。

すが ホントよ。

忠雄 しかし、「自由思想」第二号の発行は、お二人とも頑張りすぎです。先生が倒れたと思ったら、こんどはすがさん、なのにつねさんはやめていくし…。しかも、第一号の公判で、罰金が百円…、

秋水 すまないね、すが君。

すが 払えるわけないんですもの、私が入るのは仕方がないわ。

百代 お待たせしました、どうぞ。

秋水 もう慣れましたか？

百代 ハイ。

すが もう安心。いつ拘引されても大丈夫よ。大丈夫っておかしいわね。

秋水 すまない。かわってやりたいが

すが いいんですこれで。百代ちゃん、秋水先生のご飯は柔らかめに炊いてね、先生、いつもおなかの調子が良くないの。

百代 はい。

すが それから、その八百福よりも、少し足を延ばして八百金にしてね。新鮮さが違うから。

百代 分かりました。それじゃ、あたし井戸の水を汲んできます。夕方になると皆さんがいまして、たいへんになりますから。

忠雄 僕も手伝います。

百代 すみません、ありがとう。

すが 忠雄君、張り切っちゃって…、

秋水 さつきとまるきり様子が違いますね。

すが 宮下さん…なんて書いてあります？

秋水 爆裂弾の薬品の調合が判ったら、主義のためにたおれる覚悟だ、と。馬鹿なこ
とだ。

すが 爆裂弾…！

百代　すが奥様が入獄した次の日、あたしは秋水先生からお手紙を出して来るよう頼まれました。

秋水　買い物に行くなら、出して来てくれないか。

百代　ハイ、先生

秋水　私が出すと、なんでも調べられてしまうからね。

百代　ハイ、大丈夫です。

秋水　すまないね。

百代　いえ、あれっ、高知…千代子殿って、すが奥様にじゃないんだ。

秋水　君！

百代　すみません…だって、読めちゃうんだもん…。

秋水　参ったな。これじゃ新村君じゃなく君に頼んだかいがない。新村君には内緒にしてくれ。なにも呼び戻すとかそういうことではないんだ。ただ…千代子も可愛そうなんだよ…。

百代　可愛そう…？　だって、すが奥様は、先生の身がわりになって昨日行ったばかりなのに…、前の奥様だって急に田舎に帰されて…。それから数日たって、すが奥様の所へ差し入れを持って行ったとき、そのことをしゃべりました。忠雄さんにはって言われたけど、奥様に話すなどは言われてないんだもん。

すが　ホホ…、面白いわねえ、百代ちゃん。よく話してくれたわ。

百代　これって面白いことですか？

すが　ええ、もう…とつても！　「すが君、すまない」って私を送り出したその夜にしろっと千代子さんに手紙を書いているんですもの。笑うしかないじゃない。やっぱり奥様に話すべきじゃなかったです。ごめんなさい。

すが　いいのよ、教えてくれてありがとう。でも、私が知っていることは、秋水先生にはだまっていますね。

百代　もちろんです。あたし、だって悔しくて…。すが奥様が知らないと思うと…、
すが　百代ちゃん、あなた、秋水のこと、好きなのね。

百代　はい、いえ、違います！ 皆の為に頑張ってるすが奥様のことが、大好きなんです！　すが奥様は、憧れなんです、それだから秋水先生のことだって好きなんです！　あ、あの、だからそうじゃなくて、あの…

すが　分かるわ。憧れってありますものね。…人に憧れ、思想に憧れ、抵抗に、暴力に、恋に、孤独に、革命に、ただひたすら激しいものに…。でも、あれは、あの決意は、ただの憧れなんかじゃない。ただの、確認。…真つ赤な血を流す、ただの、男、だってことの…確認のために、することよ！

百代　すが奥様？　何の決意なんです？

すが　最後はね、自分でやるしかない。自分だけで…！　そういう決意…！

16　明治四二年　千駄ヶ谷　平民社　夏の終わり

百代　その頃、秋水先生とすが奥様のことが小説になりました。ふしだらな女と社会思想家を面白おかしく書き立てたデマのようなものです。でも、そんなデマや迫害の烈しさから、同志はだんだん少なくなりました。沈みかけている『平民社』という船から逃げようとしているみたいに。

忠雄　♪　なぜにおまえは貧乏する

♪　ワケを知らずば、聞かしようか、

百代　なんですか、その唄…？

忠雄　面白いだろ？

百代　ウン。

忠雄　「社会主義ラップパ節」っていうんだ。

♪　天子、金持ち、大地主、

♪　人の血を吸う、ダニがおる　♪

百代　おもしろーい！

忠雄と百代　♪　なぜにおまえは貧乏する

♪　ワケを知らずば、聞かしようか……………（笑い）

忠雄 じゃ、百代ちゃん、塚先生とここに本返しに行ってくる。

百代 ハーイ。いってらっしゃい。

百代 それからあたしは、やはり歌をうたいながら台所仕事をおえ、……ふと見上げると、先生が、じっとあたしをみているのです。

百代 先生、お加減はいいんですか？

秋水 良くないですね。

百代 じゃあ、寝てないと。

秋水 面白い歌が聞こえてきたものですから。誰から聞いたのですか？

百代 忠雄さん。

秋水 ほう…。

百代 先生は、こういう「人の血を吸うダニ」を退治するために、御本を書いていらつしやんですよね。

秋水 残念ながら、退治できるほど強くありません。近頃は疲れやすくてね。

百代 休んだらいいのに。

秋水 休むと責められる気がするのですよ。すが君の姿が浮かんでね

百代 そんなこと、すが奥様は気にしません。

♪ なぜにおまえは貧乏する

ワケを知らずば、聞かしようか

天子、金持ち、大地主、

人の血を吸う、ダニがおる ♪

そっか、退治するのは、すが奥様…。

秋水 百代君…！ 君が、こんな歌、歌ってはいけないな。

百代 口をふさがれました。病人の匂いがしました。その体が私の中に入って……、ひまわりの黄色が、青空にいっぱいひろがって、遠くでセミの鳴き声がしました……。

忠雄 9月、すがさんが身柄釈放されて平民社に帰ってきました。

忠雄 お疲れでしょう、どうぞ、お休みになって下さい。

すが ありがとうございます。けど、困ったわね。罰金、前のとあわせて七百十円にもなっちゃった

秋水 政府は我々を金しばりにして、身うごまできないようにしてる。

忠雄 こうなると、手も足も出ない。

すが いいえ、手も足も出る方法が、ひとつあります。

秋水 バカな！ 宮下あたりの言ったことを本気で考えているのじゃないだろうね。

すが 先生はお考えになったことがないんです？

秋水 確かに、そういう方法も必要であろうと、彼に話したことはあります。しかし今がその時とは思えない。

すが この世に神様はいない。いっとう上にいるのも、神様ではなく、血を流して死ぬただの男。私たちと同じように。そのことを証明するには、それしか…、

忠雄 僕も賛成です。

すが 天皇に、爆弾を！

忠雄 やりましょう、先生、

秋水 バカな…！

すが 例えば、みんなで暴動を起こしたら…、そしたらどうかしら。例えば花束に爆弾を仕立て、馬車に投げつけ、それと同時に同志が、各所で暴動を起こす。囚人を解放し、官庁を襲う…！！

秋水 それだけの人間を動かすには時間をかけた周到な準備も金もいる。そもそも、

それしか方法がないのか？ 民衆を目覚めさせるには。

すが それしか方法がありません。

忠雄 政府の肝を奪うには、それしかありません、先生！

秋水 もっと民衆を信じたまえ。民衆は必ず目覚める。起こすべきは民衆の革命なのだ。暗殺ではない。

忠雄 先生はそういうと、部屋にこもってしまったれて…、残された僕とすがさんは、話こんでいるうちに「あのこと」への計画といった、共同謀議のようになっていき…と、突然すがさんは、

すが あらっ、コスモス！

忠雄 その時初めて、昨日同志の古河君が持ってきたコスモスの花に気づいたのです。強い風にあおられても、折れそうで折れない。それでいて…可愛い花…。そうだ、可愛いっていえば…、百代ちゃんどうした？

忠雄 田舎へ帰るって…、岡田君がつれて帰りました。

すが そう…。ひまわり、コスモス、矢車草…可愛い花。昔をおもって、せつなくて、だから、あたしそういうの、大キライ。だって、ふり返りたくもないでしょう！

18

明治四三年 冬

忠雄 明けて明治43年元旦に、みんなで空き缶を爆弾に見立てて、畳に投げる練習を僕は、もう一度だけと思い、先生に計画をほのめかしてみました。本気で聞いてはくれませんでした。

すが 先生は理論の人なのよ。言葉では強いことが書いても実行となると尻込みするの。気持ちが優しいのね。この間なんて故郷へこもって、母を養いたいなんて詩を書いていたわ。

忠雄 やっぱり年寄はダメだ…そう思いました。もう完全に先生を蚊帳の外においてやろうと決めました。僕はノートに馬車の絵を描き、その角を、甲、乙、丙、丁としました。その図はロシアのアレクサンドル二世に、ソフィア・ペロウスカヤ率いるナロードニキ一団が爆弾を投じたときの陣をまねたものです。

すが 私、ソフィア・ペロウスカヤのように合図役になりたい。

忠雄 いいですね。でも、決めるのはずっと先きです。

すが まず実地調査しなければね。

忠雄 はい。…すがさん、先生のこと、平気ですか。

すが 大丈夫よ、そのことは、とうの昔にあきらめてるの。それより先生、人一倍お

母さん思いだから、フェレルの処刑：妻子まで拘禁され、凌辱を加えられた、あれがこたえてるみたいね。

忠雄 僕だって母ちゃんを思っています。母ちゃんは毎日、真っ黒になって働いて…、だけど真っ白いご飯なんか食べられないんだ。みんながあつたかい真っ白いご飯を食べられるようにすることこそ、僕達の使命、そう思っている僕は、いえ僕達は戦っているんじゃないんですか。

すが そうね。

忠雄 長い冬が終わり、雪解けの水が小川になって千曲の川に流れ込む頃、いつせいに春が来るんだ。桃色のあんずの花や、真っ白い林檎の花がいちどきに咲いて…、千曲の川がキラキラ光って…、「母ちゃん、千曲の川の水で顔を洗えば、白くなるかもしれないぞ」って言ったら、「バカこくでねえ忠雄、母ちゃんの顔は黒いからええだに。そんなこんちつとも恥ずかしくなんかねえぞ、信濃の女はない、真白のほうが恥ずかしいんさ。白くてええのはおかいこさんだけに」って…お蚕さんは働く女の人の黒い汗を吸い取って、吸い取って…そして最後に真白になるのね。

忠雄 だから、主義の為にたおれても、母ちゃんはわかってくれる。

すが ♪ 何故にお前は貧乏する

ワケを知らずば 聞かしようか

天子、金持ち、大地主、

人の血をすうダニがおる。 ♪

忠雄 民衆の血を吸うダニ…、奴らを根絶やしするために、だからこそ、爆裂弾！

19 明治四三年 三月 湯河原 天野屋

秋水 その年の3月、平民法をたたんで、私は、病後の保養かたがた湯河原の天野屋ですごしました。友人たちは私のことを心配し、革命運動から離脱させ、学者としての有為の日々に戻そうと画策していました。政府は折あらば主義者を一網打尽にひつくろうと待ち構えていましたから。その友情をありがたいたと思、私は友人たちに甘え、しばらく逗留を決め込んでいました。すが君も手伝いでついてきてくれました。

すが 先生、お茶が入りました。それと、おまんじゅう。

秋水 ああ、ありがとう。美味いな…！ …ここは静かだし、筆も進むよ。学者仲間の親切と厚意に感謝しなければな…。

すが そうでしょうか。「通俗日本戦国史」の執筆なんて、先生のなさるお仕事ではありませんわ。

秋水 これからは君にも楽をさせてやりたい。

すが 先生…。

秋水 死に急ぐことはない。

すが ……先生は、私達の計画、無駄だとおっしゃるんですか、

秋水 君だって、ゆっくりとした生活を送りたいと思っっているはずだ。子供を生んで育てて…そういう暮らしだって、

すが できないんです、私、もう子供

秋水 そうか、なあに子供なんか、いなければいけないさ。

すが 私、こわいんです…。

秋水 そうだろう。あんなこと、恐くない者はいない。

すが 違うんです。私は怖い。ここにこうしていることが。きれいな海、おいしいお魚、温泉に癒された身体に甘いおまんじゅう…。甘いもの、きれいなもの、おいしいもの…。今の私には、それがなによりもこわい…

秋水 すが君はそれを望んでいるでしょう。私のところに来て、今、ここにいないのですか。

すが その通りです。でも違う！ 先生が「あのこと」に加わらないのはいいの。先生は主義の為に、伝道をしていく方。行動する方じゃない。でも今の先生は、筆さえも曲げられた！ 私は甘いものが好き、きれいなものも大好き。だけど先生みたいに日和ってなんかいられない！ 私は先生とは違う！ なぜだかお分かりになりますか？ 先生はね、ううん、主義者の男は、結局虐げられ方が足りないのよ！ 「虐げられ、目覚めた大衆は、もはやこのままではいられない！」 そう言いながら、いつまでたってもこのままでは続けるのは、主義者の男たちが金で買ってる女郎ほどにも虐げられていないからよ！

秋水 すが君…！

すが 今から東京へ帰ります。あのことを実行する以上、夫婦でいることはできないわ。先生に御迷惑がかりますもの。

秋水 本当にそれでいいんだね。

すが 今なら、野天風呂、誰もいないんじゃないかしら。いいものよ、朝湯って、お金持ちになつたみたいで。

秋水 行つて来るよ。

すが 長湯はダメよ。身体によくないから。

秋水 ああ……。 (去る)

すが (気配) 誰?

寒村 姉ちゃん! 秋水はどこだ!

すが 寒ちゃん!!! ピストルをすてて!

寒村 駄目だ!

すが そんなもの持っていたら、話したくたつて話せないじゃない!

寒村 話なんかない!

すが どうして、ここが?

寒村 搜したさ、寝がえり秋水をな。

すが あの人は寝がえつたりしてないわ。

寒村 ウソだ! あいつは友達にたのんで、政府に手ごころを加えてもらい、主義を捨てた。

すが 寒ちゃん、それは違う。友達の学者仲間が、幸徳秋水を学者に戻すからって、政府に働らきかけたの、それで、

寒村 みんな言ってる。秋水はお前が入獄している間に、お前の女房横どりして、政府に降伏の一札を入れ、湯河原へ逃げたと。

すが そんなのデマ、尾行もつかずに温泉につかつていられるもんですか。

寒村 尾行がついてるのか?

すが そうよ。だから先生になにかあつたらその場で寒ちゃん、捕まるわ。……寒ちゃん、私たつた今、先生と別れたの。

寒村 嘘だ!

すが そんな嘘つかない。だから、いつ死んだっていいよ。

寒村 僕は、姉ちゃんなんか殺りたくない。

すが あなたは主義の為に、未来ある人。先生だってそう…。

寒村 姉ちゃん…。姉ちゃんはそうやって、先生を殺させないようにしてるだけだろ、

すが 荒畑寒村君！ 幸徳秋水は、今、野天風呂に入っています。そこを出て、つき

あたったら石段があるわ。殺るんだったら今よ！ さあ、殺してきなさい！

寒村 姉ちゃん…！（くずおれる）

すが 虐げられ方が足りないよ…

20 明治四三年五月一七日 すがの下宿

忠雄 その年、明治43年5月17日、すがさんの下宿で、古河、すがさん、宮下、

そして僕で…「あのこと」の、最後の打ち合せをする約束になっていました。

罰金がはらえなくて、次の日すがさんはまた入獄することになっていたので
す。この日、すがさんと僕は夜行で来るという宮下を、朝から待っていたので
す。でも、宮下はなかなか現れず…、

すが 宮下君、本当に今朝には着くと言ったのね。

忠雄 はい。

すが それにしては遅いわ。入獄前に、最初に爆裂弾を投げる者をくじ引きで決めて
おこうと思ったのに…、馬車の経路も確認しなければならぬし…、

忠雄 宮下の分は代理で僕が引きます。

すが ええ、それにしても遅いわね。途中で具合でも悪くなったのかしら？

忠雄 しかし…、いや、宮下に限って…、

すが どうかしたの？

忠雄 あいつ、この間会ったとき、妙に浮かれてて…

すが どういうこと？

忠雄 最近、女ができたみたいで、

すが オ・ン・ナ？

忠雄 友人の女房とできちまったとかで、思い詰めて、まさか日和ったんじゃ…、

すが 宮下君って…、友達が少ないかな？

忠雄 ええ、そうです。だから、親しくなった友人を裏切ることになったって気にし

てて…。「今はそんなときじゃないだろう」って言ったんですが、あいつ、その女のことで頭がいっぱいみたいで、

すが どうしよう、私、動悸がしてきたわ…。友達のない宮下君に、急に親しくなる友人ができて、その妻と関係するなんておかしらって、どうしてそのとき思わなかったの、忠雄君！

忠雄 ああつ…！

すが その男はきつと犬よ。そして、女房は、おとり…！

忠雄

すがさんの感は当たりました。その日、明科駐在所の巡査が宮下太吉を拘引。宮下の友人は、同じ工場に入り込んだスパイだったようです。この捜査の指揮官、平沼騏一郎は、この機会に日本中の無政府主義者、社会主義者を残らず取りおさえる大方針をとりました…。

21

明治四四年一月二五日

すが

たった四人きりの企てです。四人きりの犯罪です。なのに、なんと多くの人たちが捕らわれたのでしょうか…。 いったう上におる男は、何の罪も犯していない関係のない人を何人でも何万人でも殺せるのに、なんで女は…：下のものは、上におるたったひとりの男を殺せんのか？ 看守に言われたわ。「結局のところ、幸徳秋水を引きずり込んで、無理心中か」それは違うで！ 天皇だけやない、所詮、虐げられていない主義者の男たちを、引きずり降ろしてやりたかっただけ。寒村…。あなたが助かったことが嬉しい…。 赤旗事件でつかまってくれていてよかった…。 狭い、独房の冷たさに、私は思わず乳房を抱きしめてしまうの…。 一度も赤ん坊にふくませたことのない乳首…。 体はやせ衰えていくのに胸のふくらみはそのままで。その胸を抱きしめて、毎朝毎朝、生きていることの喜びを感じます。でも、それも、おしまい。今朝、お頭付きの御飯が出ました。

22

明治四四年四月三日

代々木 正春寺

百代

あのおう…、

寒村 あっ、どうぞ。僕はもうすみましたから。

百代 さっき、もぞもぞ言ったの、なんですか？

寒村 ああ、辞世の句です。この人、管野すがの。ほら、ここに刻まれているでしょう。

百代 ああ、これ…。

寒村 『くろがねの窓にさしいる日の影の移るを守り けふも暮らしぬ』

百代 …。

寒村 …よく眠ってますね。男の子ですか？

百代 女の子です。起きると大変なんです、こんな小さいのに、すっごく声が大きくて。言いたいことがいっぱいあるみたい…、

寒村 ハハ…、それはいい、実にいい。声の大きな女の子、育ててください。

百代 はい。

寒村 失礼します。

百代 はい。

百代 ここは下淀橋町の正春寺、すが奥様が眠っています。あたし…、頑張ったんです。みいんな、こん子のことを流そうと…。あんなに秋水先生に心酔していた兄でさえも…。でも、あたし頑張りました。だってすが奥様、言っていたもん。いつかきつと、みいんながぬくいなあ…って、思える世の中がくるんだって。子供を産んで育てて…、そうやってどこまでも続いていたら…、だから…。管野すが、不思議な人…。妖婦、奸婦、魔女、主義者、姉ちゃん、編集長、謀反人…。でも、あたしにはやっぱり、母さんです…！ 初めて会った時、「あの子にはさつまいも、あの子には焼きおにぎり、あの子には椅子」…って、母さんみたいに。だからあたしも、みいんながぬくいなあ…って思える母さんになる…！ 今日、おひなさんです。四月の桜の頃、あたしんとこの田舎は、おひなさんです。みいんなが、女の子の幸せを願う日です。雪が舞って桜が吹雪きます。雪と桜とお雛様…。あたし、好きなんです…。

幕